



2階縁側より中庭を見る。黄金の蔵が中庭に光を落とす。

### 金箔で街を飾る

金沢は日本の金箔の99%を生産しているという。それゆえに金沢の佇まいの中に金箔を使った建築、ランドスケープ、インテリアがあってもよいと思いつけていた。しかし、踏み出させないまま10年以上が過ぎた。



上：南側立面。重要伝統的建造物群保存地区にあるため外観は保存継承されている。下：前面の通り。

箔の小売り店舗である「箔座ひかり蔵」は重要伝統的建造物群保存地区のひがし茶屋街に立地している。そのために外観は伝統の保存と修復が求められる。インテリアは建築の基本的空間・形態を保存しつつ、使用用途に合わせた若干の改変のみが認められる。長い間ひがし茶屋街の保存再生に関わってきたが、ここでの建築家としての楽しみは、100年以上も前の見えないつくり手たちと対話しながら建築の作法や心を学んだり、今の私たちの時代のデザインを付加することを許してもらったりする営みである（「兎夢」本誌7008）。

今回は箔屋が入るということで、中庭の奥にひっそ



配置 縮尺 1/3,000  
「旧東のくるわ 伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告書 1975」をもとに編集部が作成。

りと建つ蔵を念願の金箔で飾る提案をした。目立たない中庭とはいえ、外壁に金箔を貼ることは、意味的にも技術的にも勇気がいることだったので、逡巡しながら何回も現場に立ち、見えない昔のつくり手にぶつづつ話しかけてきた。何とか許してもらえたと得心し、金99% プラチナ1%の金箔を漆喰下地、カシュー系の接着剤、コーティングなしで貼り上げた。蔵の内壁は高山の左官作家挟土秀平さんに依頼した。完成した金箔の蔵は、陰影の濃い空間の中で味わい深い華やかさと静けさで行き交っており、午前の短い時間陽光が差し込んで光り輝く瞬間があるが、表通りからは細い格子を通して、かすかに感じる程度である。嫌いなものには否と明確に表明してくる市民に比較的好評なのは、商家や屋敷の外観が地味で黒っぽいにも関わらず、インテリアでは華やかな九谷、友禅、蒔絵、茶道、華道、能謡が満ちた「裏は花色木綿」の様相を見せる金沢らしさからであろうか。（水野一朗）